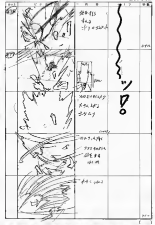
愕天王召喚シーン②



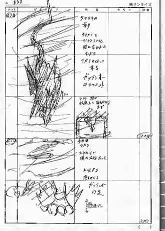
No. 137

㈱サンライズ

カット	ピクチャー	内容	セリフ	秒数
278		地面すれすれ 走る ミドリのエレメント	〜〜〜ッ!	0+12
279		pan		
		地の引き裂けるよう 大きく上がる 土ケムリ (つづく)		
		のたうつ様に タツマキのように 渦をまき はじめ		
		大きくうねる		3+0

( )

愕天王召喚シーン③

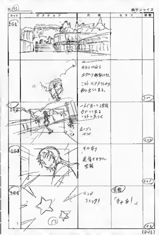


No. 338

㈱サンライズ

カット	ピクチャー	内容	セリフ	秒数
278		タツマキの 寄り タツマキを ガヤフラシヤラと 間にながれ ながら		
		ドドドとせりよって 来る ゴッテンオー のシルエット		
		ラスト 迄が 拡散して海がでる まで		(2+18)
279		海面 ワドン 土ケムリに 風の効果あって 上からドタ 落ちてくる		
		ゴッテンオー の足 画面ブレ		2+10

命と奈緒の出会いのシーン①(第2話)

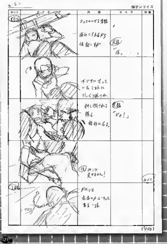


No. 51　㈱サンライズ

カット	ピクチュア	内容	セリフ	秒数
161				
		木立ちの向う 土ケムリ 轢輪[illegible] ミコト ヘアピンから 飛び出してくる。		[illegible]
162		一人で歩いてる奈緒 走ってくる ミコトに気づく 走りブレ [illegible]		[illegible]
163		その寄り 表情ビキツル 奈緒		[illegible]
164		マンガ ショック!	奈緒 「きゃあ!」	[illegible]

(2-43)

命と奈緒の出会いのシーン②（第2話）



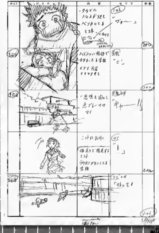
№ 5L

㈱サンライズ

カット	ピクチュア	内容	セリフ	秒数
155		ズッコロンでる奈緒 痛みこらえながら 体勢こすが	、 奈緒 「痛っ…」	
		下じきになって いたミコトに 引っくり返され		
		押し倒される 様な 態勢になる。	奈緒 「やっ!」	
		注 パンツ 見せません!		4+0
156	PAN	ガバッと 命おおいかぶって 来る・コト		

(5+0)

命と奈緒の出会いのシーン③(第2話)



No. 53

㈱サンライズ

カット	ピクチャー	内容	セリフ	秒数
		・クチビル ハレあがらせて ベソかいてる ミスト。	(ミスト) 「ブォ〜」	2+0
16[illegible]		ハズかしい格好で かたまってる奈緒 ピクと片眉 ピキつらせて	(奈緒) 「ヒ!」	1+0
168		・悲鳴を聞いて 急ブレーキのマイ	(奈緒)OFF 「キャー!!」	
		ミストに気付く 猛走りで逃走する ミスト テッポンダウンしてる 奈緒	(マイ) 「!」	2+12
168			(マイ) OFF 「待って!」	1+6

→ 流れ Pan

特別書き下ろしノベル

舞-HiME Step.0

『なつきのプレリュード』

（前編）

作・吉野弘幸

イラスト・佐藤健悦

「舞-HiME」脚本＆シリーズ構成の吉野弘幸氏が書き下ろしたオリジナルストーリー！　なつきの隠された過去、そしてHiMEとしての覚醒――そのすべてが、いま明かされる!!

Prologue ～from step #25～

波が、寄せ返す。

断崖に当たって、砕け散る。

風華町から、美袋に至る海岸沿いの道。

その途中の、海に向かって張り出した突端部に、なつきは一人佇んでいた。

海風が駆け抜け、彼女の黒髪を嬲る。沈み行く夕日に映えるオレンジ色の制服が、かすかにはためく。

「母さん――」

その風にかき消されそうな小さな呟きを漏らすと、なつきは目を閉じた。

その脳裏に蘇るのは、あの夜の記憶。

消そうと思っても、消すことの出来ない、10年前のあの夜の出来事だ。

美袋の、岩境製薬の研究所――「お母さんの勉強部屋」と呼んでいたあの研究室で、仕事の終わりを待ち疲れて眠ってしまったなつきを揺り起こした母の手。

いつもは穏やかで優しい母が、初めて見せた必死の形相。

乞われるまま、なつきの一番の友達だったデュランを連れ母の車に乗り込み、暗い道を飛ばしたこと。

そして――この場所だ。

この場所で『彼ら』が待ち受けていた。

黒い服に黒いサングラス。岩境製薬の研究所に出入りしていた『黒いおじちゃん』たち。いつもは黙って研究所を守るようにひっそりと佇み、それでも時々、母を待つなつきと、こっそり遊んでくれたり、飴玉をくれたりしたこともあったおじちゃんたちが。

怖い顔をして、立っていた。

それが、あの夜、なつきが最後に見たものだ。

続く記憶は、もう映像ではない。車のブレーキの放つ甲高い音と、ガードレールを突き破る衝撃。そして襲い来る浮遊感と――母の悲鳴。

きっと、自分も何かを叫んだのだろう。

だが、その言葉は、デュランと、そして母の命と共に、この断崖の下に眠っている。

「ここに、いらしてたんですか――」

背後からの声が、なつきの思考を遮った。

「貴様こそなぜまだこんなところにいる？　一番地は、もう無いんだろう？　――迫水」

なつきは振り返らず答えた。

「ええ。ですが逃げ出す前に、あの人に挨拶をと思いましてね――、かまいませんか？」

迫水。風華学園の教師であり、一番地と呼ばれる組織のエージェントである――いや、だった人物。

その手には、花束が握られていた。

「学園の花壇で育てた花ですよ。彼女がこんなものを喜ぶかはわかりませんが、あいにく、街の花屋もみんな閉まってましてね」

「好きにしろ」

相変わらずの無愛想な答えに、どこか安心したかのように微笑むと、迫水は「それでは失礼します」と花束を投げ入れる。

束ねられた花は、波を受けると脆く闇に散らばり、互いに揉み合うと……やがて波間に消えて行った。

――まるで、私たちみたいだな……。

寂しげに呟くと、なつきは目を上げた。

その視界に、巨大な媛星の姿が飛び込んでくる。

無から有を生み出す高次物質化能力。その力を宿す少女たち、HiME。

そして、HiMEたちにしか見えない赤い星、媛星。

かつて、月の側でぼんやりと光っていたその星は、いまや細部まで見届けることが可能なほど大きく、そして凶々しく輝いている。

HiMEであるなつき自身と、ここまで生き残った三人のHiMEに、終わりの時を告げるかのように。

そう。いま、全てが終わろうとしている。

HiMEとして覚醒した、あの夏の終わりの夜から始まった、なつきの戦いが。

＊

教会の鐘が鳴る。

海外の有名な寺院の鐘を模したというその鐘の音は、この学園――小・中・高一貫教育で有名な、日本でも屈指の名門私立、風華学園の名物の一つとなっている。

だが、校舎裏の草原で居眠りをしている少女にとっては、それもただの目覚まし代わりに過ぎなかったようだ。

――ようやく、放課後か……。

授業が終わり、放課後特有の喧騒が満ち始める気配を感じながら、中等部の制服を着た少女は身を起こす。

彼女の名は、玖我なつき。

風華学園の中等部、三年F組の生徒である。

「ん……」

なつきは立ち上がって伸びをする。

その背中にはらりと落ちる長い黒髪。無駄な肉の付いていない、スレンダーな肢体。その分、胸回りはいささか寂しいが、制服から伸びたしなやかな手脚は、セーラー服に似たそのデザインと相まって、この年代の少女らしい、微妙な色気の萌芽を感じさせる。

「なつき、またサボりはったん？」

と、背後から、なつきに呼びかける声があった。

そのやわらかな京都弁を聞くまでもなく、なつきのことを名前で呼び捨てることのできる人物はこの学園に一人しかいない。

「午前中は我慢して出たんだ。それに、出席日数はちゃんと計算してある。お前に小言を言われる筋合いはないぞ、静留」

振り向いたなつきの目の前には、高等部の制服を着た少女――と言うには、すでに大人の色気と余裕をずいぶんと感じさせる、ひとりの女生徒が立っている。

藤乃静留。高等部二年に在籍する。この学園で唯一と言っ

て良い。なつきの友人である。
「相変わらずいけずやねぇ……でも――」
嫣然と微笑むと、静留はなつきに近寄り、なつきの頬につぃと人差し指を走らせる。
「そこがなつきのええとこやけど」
「――！」
その言葉に、思わずなつきの頬が染まる。
「ふふ。赤くなりはって……ほんま、可愛らしいな。なつきは」
微笑む静留に、なつきは頬まで滑り降りてきた静留の指先を振り払うと、頬を染めたまま怒鳴った。
「だ～～～っ！　ったく、お前はいつもいつも――そんなに私をからかうのが楽しいか!?」
「ええ」
あっさり答える静留に、二の句が継げなくなるなつきである。
――ったく、この女は――。
そうなのだ。普段は『クール』で『近寄りがたい』空気を、意図して周囲に張り巡らせているなつきに、いともやすやすと近づいてくるのが、この静留という先輩なのである。
何が楽しいのか――いや、言葉通りなつきをからかうのが楽しいのか。なにかにつけてなつきをかまう。
どれだけすごんでも、無愛想に接しても、なぜかペースを崩されて、気付けば静留のいいように弄ばれている。
しかもなつき自身、それがあまり不快ではないのだ。

* * *

これは、意図して周囲から人間を遠ざけているなつきにとって、ある意味、異常事態だった。
「照れるわぁ。そんなに穴の開く程見つめはって――」
「ちが～う！　まったくお前は――。で、私に何か用なのか？」
誤魔化すように、なつきは問い返した。
「用……言うほどのもんやおまへんけど……。迫水先生が、探してはりましたわ。なつき、最近バイクで登校してはるやろ？　執行部から担任の迫水先生のところに、注意が行ったらしくてなぁ」
その言葉に、なつきは舌打ちをする。
「珠洲城か……」
先日、バイクで登校したところを『学園でもっとも熱心な執行部員。ただし空回り気味』で有名な、珠洲城遥に見つかり、さんざん噛みつかれたのだ。
「厄介な人に見つかりはったねぇ。執行部も、いまは強化取り締まり中みたいやし――。迫水先生も、随分困ってはったわ」
「強化取り締まり中？　何かあったのか？」
執行部は、生徒会に属し、風紀取り締まりと学園の治安維持を司る部門である。それが強化取り締まりを行うのは、学園内に何か特別な事態が起こったときのみだ。
「野犬が学園内に出没してるようなんです。取り締まりはそのためですよ」
そう言いつつ現れたのは、迫水開治――なつきのクラスの

担任だ。でっぷりと太った身体に、鳥の巣でも乗せているのではないかというアフロヘアーと、見た目のインパクトは強烈だが、人物そのものは大人しめで、無難な教師――それがなつきの彼に対する評価である。

「野犬だと……？」

「ええ。それもずいぶんと大型の」

真面目な顔で言う迫水に、なつきは皮肉な笑みを浮かべて切り返した。

「まったく、幽霊騒ぎがあったり、バケモノ騒動があったり……、そのテの話題に事欠かないな、この学園は」

「伝統がある学校にはつきものですよ。――それより」

「ん？」

「玖我さん、バイクの件、なんとかしてもらえませんかねえ？　校則にも書いてあるとおり、バイク通学は禁止なんですよ。――そうだ、藤乃さん。あなたからも説得してくださいよ」

「うちも、できればやめて欲しいんやけど……聞くような娘やと思いますぅ？」

「ですよねぇ……。玖我さんは、頑固ですから」

「ええ。ほんまに」

「困ったものです」

うんうんと頷き合う迫水と静留である。

「――おい。本人が居る前で、勝手に話を進めるな」

「せやけどなつき……言うても聞いてくれへんやない」

「ですよねぇ、授業にも出てきてくれませんし……」

「う……」

思わぬ二方面からの攻撃にたじろぐなつきに、迫水は不意に近寄ると、なつきにだけ聞こえるよう、小声で囁いた。

「それにですねぇ……夜中に繁華街をうろついて、怪しげな連中がたむろするバーに出入りするのも、やめた方がいいですよ。――あなたのようなお姫様は」

「な……！」

なぜそれを――そう言いかけて、なつきはかろうじて踏みとどまる。動揺すれば、その事実を肯定することになってしまう。

「……な、何のことだ？」

ことさら冷静を装って問い返すと、迫水は苦笑して、

「とにかく、注意はしましたからね。くれぐれも頼みますよ。担任してる生徒の素行は、ボーナスの査定に響くんですから」

普段の呑気な口調で告げると、皺だらけのハンカチで汗を拭きつつ、去っていった。

「……………」

なつきは睨むように、その背中を見送る。

――なぜ迫水が知っている？　それに、私を姫と呼ぶ口調どこかで……？

「なつき？　そないな怖い顔して、どうしはったん？」

「あ……ああ……なんでもない。とにかく今日は、帰る」

誤魔化すなつきに、静留はわずかに眉根を寄せる。が、すぐに振り払うように笑顔になると、

「もう帰らはるの？　名残惜しいなぁ。うち、もう少し、な

つきと居たいわ……」
いきなり背後から抱きつくように、なつきに身体をすり寄せた。
やわらかな感触が、なつきの身体を包む。
「こ、こら静留！　あ、あたってる！」
「なにがどす？」
「その、む……。ええい、自慢のつもりか！　放せ!!」
クスリと笑うと、静留はなつきを解放した。
「最近、下着の選び方も随分さまになってきたみたいやねぇ。ええ感じどすわ」
「馬鹿っ！」
真っ赤になってうろたえるなつきは、そのまま怒ったように早足で、学園側の林の中に分け入って行く。
おそらく、バイクが停めてあるのだろう。
そんななつきを見て、静留は安心したように小さな笑みを漏らす。
「待って、なつき。着替えるんやろ？　手伝いますわ」
そしてからかうように声をかけ、うるさい、来るな、というなつきの罵声が答えると、静留はさらに楽しそうに微笑み、なつきを追って林の中に消えていった。

＊

その一連の顛末を、林の木の上から見つめている目があった。
――ふふ……。もうすぐだよ、お姫様たち……。まずはなつきちゃん、君からね……。
木の枝に腰掛けた、中等部の制服を着た白髪の少年は、そう呟くと、満足げに微笑んだ。

Ⅲ

「――「一番地」だと？　それが連中の名前なのか!?」
「ああ。正式名称なのか――あるいはただの通称なのか、それすら不明だが……そう呼ばれているらしい」
放課後の顛末から数時間後。なつきは月杜町――学園のある風華町の隣に位置する繁華街――にある、「ロールシャッハ」というバーのカウンターに座っていた。
「一番地……」
なつきは、興奮を押し殺すように、その言葉をもう一度繰り返した。
あの夜、母が死んで以来、なつきの中にあるのは、自分から母を奪った組織への復讐……それだけだった。そのために自らを鍛え、わずかな手がかりを頼りに、母が関わっていたらしい組織を追ってきた。
だが、実際問題として、ただの女子中学生がやれることなどたかが知れている。随分と無茶もし、また危ない目にも遭ったが、組織の実体はまったくつかめず、なつきは無力感にさいなまれていた。
そんな折である。なつきがこの男――いま、一つ席を空けてカウンターに座る男に出会ったのは。
男は、ヤマダと呼ばれていた。

素性は知らない。ヤマダという名前も、おそらく偽名だろう。そもそも日本人ですらなく、元はどこかの国の工作員だったという噂もあるが、なつきは気にしなかった。ヤマダは裏の世界に通じ、それに見合う金額さえ支払えば、合法非合法を問わず、情報や武器を手に入れてくれるのだ。なつきには、それで充分だった。

現に、今日もこうして、いままでその存在すら疑われた組織の名を仕入れてきたのだ。

一番地。

それが母さんを利用して殺した、組織の名か……。

不思議なもので、それまで雲を掴むようだった相手が、名前を与えられただけで具体的な存在感を持ち始める。

そんななつきの密かな興奮をよそに、ヤマダは淡々と続けた。

「かなりヤバい連中らしい。下手をすると、この国そのものを敵に回すことになるかもしれん」

「国――？」

「ああ。政府の中枢にまでかなり食い込んでる印象がある。あくまで、俺のカンだがな」

「――――」

母の死が、なつきの必死の訴えにもかかわらず、完全に事故として処理されたことから、薄々感づいてはいた。だが、やはり――。

それでもなつきは、強がるように微笑む。

「面白いじゃないか。やってやるさ」

「フン――」

滅多に表情を変えないヤマダが、おもしろがるように口の端を歪める。

そして、新たなカードを切り出すように、口を開いた。

「――高次物質化能力。聞き覚えはあるか？」

その単語に、なつきはピクリと反応する。高次物質化能力。なつきの母があそこで研究していたのが、そんな名前だったはず――。

「Highly-advanced Materialising Equipment ――通称『HiME』。連中が探し求めているのが、その力を持つ人間らしい」

――ヒメ――？

時折、母は自分のことをそう呼び、またあの研究所にいた黒服の何人かも、自分を「姫」「お姫様」と呼んだ。

そもそも、母は八月に生まれたなつきの名に『夏姫』と漢字を当てるつもりだったらしい。父の好みで結局、平仮名になったものの、それでも母はその字に思い入れがあったのか、なつきを時々「私のお姫様」と呼んだ。

そのころは、ただのあだ名のようなものだと思っていたが――。

「連中は、その力を持つ人間を、風華学園――知ってるだろう？　隣町にあるあのお坊ちゃん学校だ。あそこに、集めてるようだ」

「――――」

ヤマダの口から、自分の通う学校の名が飛び出すと、なつきは動揺を隠しきれず、鋭い口調で問い返した。

「『力』と言ったな。……具体的にはどんな力なんだ？」
「さあな。そこまではまだ調べ切れていない」
「そうか……。では、続けて調査を頼む」
なつきは、懐から出した封筒をヤマダの前に滑らせた。が、ヤマダはその封筒に手を付けず、しばらくためらうように見つめると、珍しく仕事以外の口をきいた。
「俺は基本的に依頼人の事情は詮索しないんだが……ひとつだけ……聞いておく」
「何だ」
「あんたみたいな嬢ちゃんが、なぜこんな組織を追う？　中学生の遊びにしちゃ……シャレにならん相手だぞ」
「……」
「下手を打てば消される。脅しじゃなく、な」
ヤマダは、手にしていたロックグラスを小さく揺らした。溶けかけた氷が、カラン、と澄んだ音を立てる。
「かまわないさ。私はその為に生きてるんだ。連中を追いつめて——必ず……組織ごと潰してみせる」
低く、押し殺した口調。
ヤマダはわずかに呑まれたように、なつきの瞳を見つめる。そこに宿るのは、純粋であるが故に、危うい光。ヤマダがかつて国のためと教え込まれ、それを盲信していたころの、愚かだが……まぶしい輝き——。
——たいした嬢ちゃんだよ。危なっかしくて見てられたもんじゃないが……。
視線を外すと、ヤマダは封筒に手を伸ばし、懐にしまい込んだ。
「また、何か情報が入ったら連絡する」
「……わかった」
短く答えると、なつきはヘルメットを手に、カウンターの席を立つ。
タイトな革ツナギが描くボディラインは、ようやく大人への階段を上り始めた少女らしく、まだ固い線を残している。それを眺めて楽しむ趣味はヤマダにはなかったが……それは、彼女のまとう張りつめた緊張感をさらに助長させ、どこかほっておけない雰囲気を醸し出している。
——俺としたことが……。情に流されてこんなヤバい橋を渡るのか。
ヤマダは苦笑する。
なつきに語った言葉は、脅しではない。事実、一番地と呼ばれる組織を調べ始めてから、彼の周辺には不穏な影がつきまとっている。それに対処する自信はある。だが、彼らが手を回しているのか、情報屋としての他の商売は、ほぼ上がったりの状態だ。
——だが、それも面白いか……。久々に、喰い付き甲斐のありそうな相手だしな。
ヤマダは……久しく忘れていた鈍い炎が自分の中に灯るのを感じつつ、それを消すためなのか、あるいはさらに燃料を注ぐためなのか、大きくグラスをあおった。

＊

店を出たなつきは、路地裏に停めたバイクに跨り、ヘルメ

ットを被るため、長い髪を束ねていた。

まだ、手に入れてひと月にもならない愛車。かつて、父が乗っていたのと同じ、外国製のバイク。

なぜこの車種を選んだのか、なつき自身にもよくわからない。なぜなら、なつきは父を憎んでいたから。

母が死ぬと、重病で入院していたなつきを置いて、去っていった父。あとでわかったことだが、互いに仕事を持つ両親は、ただでさえすれ違いが多く、上手く行っていなかったらしい。それでも、二人はなつきの前では、仲むつまじくふるまっていた。

バイクが好きで、80年代のブリティッシュ・ロックを愛し、愛犬にバンドの名をもじって「デュランⅡ世」と名付けた父。自分の経営する貿易会社を切り回して海外を飛び回り、その忙しさの中でも、余暇にはなつきを旅行やキャンプに連れ出してくれた父——。

なつきは、父が好きだった。

それだけに、許せないのだ。

父はいま、海外で他の女と暮らしている。籍こそ入れていないようだが、その女との関係は、母が生きているときからのものだという。

それでも、律儀に養育費の送金は——それも一人娘の生活費としては、過分な程ある。このバイクにしても、ヤマダに支払う情報料にしても、出所はそこだ。

父の寄越す金など、ドブに捨ててもかまわない。そう思う反面で、その金が無ければ、生活費にすら苦労し、復讐など考えられもしないだろうことも自覚している。

——憎い父親の脛をかじり、母の復讐を、か……。

いや、それはもしかしたら、なつき自身の、幸福な子供時代の復讐なのかもしれない。

ヘルメットの下で、自嘲するように口元を歪ませると、なつきはアクセルを捻り、バイクを発進させた。

バイクは、低く太い唸りを上げ、月杜の狭い路地を抜けて行き、風華町へと続く海沿いの道に出る。

季節は、夏から秋へと移ろうとしており、ともすれば肌寒く感じられる空気が、いまのなつきには心地よい。

澄み切った空には、満月と——その側によりそうように、赤い星が覗いている。

「なつきちゃん。あの星が見えることは、誰にも言っちゃだめよ……」

幼い頃から、なつきに見えた。なつきにしか見えなかった赤い星。母は、そのことを他人に漏らしてはならないと、なつきに固く口止めしていた。

——母さん、あなたは何を知っていたんだ？

訝うなつきの脳裡に、先ほどのヤマダの言葉が蘇る。

「高次物質化能力、通称、HiME——」

「——連中は、その力を持つ人間を、風華学園に集めてるらしい」

それは意外でもあり、また、なぜか得心がゆくものでもあった。

——やはり、あの学園には何かがある……。

続いているバケモノ騒ぎ。最近は、大型の野犬だったか。

そして、あの迫水という教師の、何かを仄めかすような台詞。

考えてみれば、自分があの学園に入学したのも、いささか不自然な部分がなかったわけでもない。なつきが父の希望で私立中学を受験することを告げたとき、小学校の担任は即座に風華学園の名を挙げた。

『もし、あなたが言い出さなかったら、私から勧めるつもりだったの。推薦枠があるのよ、その条件があなたにぴったりで――』

たしか、そんなことを興奮気味に語っていた。

「HiME、か　」

その言葉と、自分には何か関係があるのだろうか？

――めず　つきとめてみせる　、

山を越えると、道は風華町へと抜ける。

街は静まり帰り、山の斜面にひっそりとそびえる学園は月明かりにうっすらとそのシルエットを覗かせる、

その姿は、まるで異世界の宮殿のようだ。

なつきは、挑むようにアクセルをあおる。

夜の街を切り裂く爆音を一つ残して　バイクは学園へと続く坂道を駆け上っていった。

と――。

その爆音に答えるかのように　長く大きな遠吠えが　学園の裏山に谺した。

その声は　エンジンの音にかき消され、なつきの耳に届くことはなかったが――、

Ⅲ

「あれ　？　玖我さん？」

バイクを降り、ツナギを脱いで中等部の制服に戻ったなつきは、学園の裏門でいきなり声をかけられ、驚いたように振り返った。

立っているのは、中等部の制服を着た女生徒だ、

「お前は　」

見覚えがある。隣のクラス――同じ中等部三年にいる女子の一人だ。

「あ、あたし　日暮あかねです」

あかねと名乗った少女は、何故か頬を染め　恥じらうようになつきを見つめている。

そう、たしかこの娘は、クラスメイトを遠ざけ「美人だがとっつきにくい」という評判を獲得しているなつきに　時々思い切ったように話しかけてくる女子の一人だ。

「たしか、D組だろう？　たまに体育で一緒になる」

「覚えててくれたんですか⁉」

あかねの頬がますます紅潮した。

「まあな。でもどうしたんだ？　こんな時間に」

「あ、あの、あたし――、国語のノートわすれちゃって。それで取りに来たんですけど、最近、野犬とかが出るっていうし、なんか、怖くて――、そしたら遠吠えとか聞こえてきて、ヤだなぁ、帰ろうかなって思ってたら、玖我さんが来て、そ

れで、あたし、あの、思わず……」

とりとめのないまま、懸命に一息で喋る。

その勢いに苦笑しつつ、なつきは言った。

「ちょうどいい。私も教室に忘れ物があるんだ。ついでに取ってきてやろうか？」

「えっ、あ、だったらあたしも一緒に行きます！」

「いや……。もう遅いし、お前は帰れ。ノートはあとで届けてやるから」

「でも、そんなの……、玖我さんに悪いです」

「気にするな。私は夜中に一人で出歩くのには慣れてるし――それに、私がこんなサービスをするのは滅多にないぞ？　人の親切は素直に受けろ」

微笑むなつきを、あかねは奇跡でも目の当たりにしたかのように呆然と見つめ、凍り付いている。

「……おい、日暮？　どうした？」

「あ、ありがとう、玖我さん！」

あかねはぺこりとお辞儀をする。

「そんなにかしこまらないでくれ。一応、同級生なんだぞ？　私たちは」

「――はい！」

嬉しそうに微笑むあかねに、あとで電話をするからと携帯の番号だけ尋ねると、なつきはあかねを見送った。

あかねは、嬉しそうに、また、恐縮するように何度も振り返りながら、麓の街に伸びる坂を降りていった。

――本当に珍しいな……私にしては。

自分でも苦笑する。実際には、これから学園の内部を調べるために邪魔だったからというのもあるのだが。

しかし、同年代の女の子とこれほど親しく口をきいたのも静留を除くと随分久しぶりのような気がする。

母が死んで以来、他人など信じない、友人などいらないと、そう頑なに信じていた自分が、静留と出会って以来、少しずつ変わり始めていることに、なつきはまだ気付かずにいた。

＊

夜の学園は、独特の雰囲気がある。

暗く、静まりかえったその様子は、昼間の生徒たちの喧騒がにぎやかであればあるほど、それが失われた夜には虚ろさが引き立ち、息詰まるような圧迫感を与える。

普段、あまり学校に思い入れがないなつきにしてもそれは同じ事で――いや、だからこそ余計にかもしれないが、夜の学園は、不気味にのしかかってくるように感じられる。

敷地の外れには寮があり、また、学園に併設されている教会や、学園を見下ろす高台の理事長の屋敷には、それぞれ神父や理事長たちが住んでいるのだから、完全な無人というわけではないのだが、そもそも周囲を山と海に囲まれ、広大な面積を擁するこの風華学園は、やはり人の気配――いや、人の生活が産み出すエネルギーとでも言おうか――に、徹底的に乏しかった。

――さて……。

なつきは月明かりに照らされ、美しく、しかし不気味にそびえる水晶宮――全面ガラス張りのデザインからその名が付

けられたらしい、校舎のエントランス——を見つめながら。
これからの行動について思案を始めた。

　なんとなく動いて学園に乗り込んできたはいいが、とりたてて手がかりというほどのものもない。

　近頃よく噂されているバケモノや幽霊についても、なつきはよくある学校の怪談のたぐいだろうと、ハナから信じるつもりはない。ただ、野犬の噂だけがなつきの心に妙に引っかかってはいるのだが。それも一番地やHiMEという言葉に関係しているとは思えない。

「とりあえず、日誌のノートでも取りに行くか……」

　そう呟いて、なつきが水晶宮に脚をふみいれようとした瞬間——。

——うおおおぉぉぉぉぉぉぉん——

　長く鋭い遠吠えが、学園の静寂を切り裂いた。

——野犬!?　だが……？

　鋭く長く響いたその遠吠えは、野犬のものにしてはあまりに奇妙で——切ないような、何かをもとめてやまぬような。

　そんな響きを宿していた。

　ドクン……となつきの心臓が高鳴る。

——熱い……。

　臀部のあたりが、妙な熱を持ちはじめたことを感じる。

　そう、なつきに生まれつき備わっていた。あの不思議な模様をした痣のあたりが——。

——るうぉぉぉぉおおおおん——

　再び、遠吠え。

　先ほどより、さらに近く、大きく、その声が響く。

——なんだ……なぜこんなに、身体が……熱い……？

　と、そのときである。

「やあ、はじめまして、なつきちゃん」

　突然の声に、なつきは素早く周囲を見回す。

　声の主は、非常識にも水晶宮の屋根の上に立っていた。

「何だ、貴様は……!?」

「ボクは凪。炎凪。よろしくね」

　中等部の制服を着た、白髪の少年。おもしろがるように歪められた口元に、切れ長の目元が印象的だ。

「ようやくこうしてキミに会えた。ずっと見守ってるの、辛かったんだよ？　なんかさぁ、いろいろ一生懸命調べてたでしょ。無駄なことするなぁって思ってたから」

「無駄だと!?」

「そ。だって時が来れば、ぜ～んぶわかったのに。キミが何者かも、HiMEとは何なのかも」

「——!!」

　驚くなつきを見下ろしたまま、凪と名乗った少年は、すっと空の一点を指し示した。

　その先には、月と——赤く光る星がある。

「あの紅い星……あれは媛星っていうんだけどね。それが見える娘が、HiMEさ。それに、キミの身体のどこかにあるでしょ？　こんな形の痣——HiMEの紋章が」

　少年は、指先である模様を描いてみせる。

　その軌跡は、なぜか空中に光の筋となって留まり、ある図

形を形作った。

「それは——」

思わず、先ほどから疼くように熱をもった、脇腹の痣を押さえる。少年が描いた図形は、その痣と同一のものだったのだ。

「ふふ——、聞いた？　でも、ホントに驚くのはまだ早いよ。——さあ　はじめよう。君の子供が——チャイルドが、君を求めて啼いてるよ——」

——うおおぉぉぉぉん——

その咆哮と共に　黒い影が水晶宮の上に舞い降りた。

なつきはその姿を目の当たりにし、息を呑む。

ぽっかりと空間を切り抜いたような、深い闇色の獣が、なつきを見下ろしている。

それを獣と感じたのは、四本の脚で支えられた胴体と、頭とおぼしき部分にある——闇の中でそれだけが爛々と輝く赤い目が——獣をイメージさせたからにすぎない。

だが——おそらく世界中のどこにも、こんな獣はいない。

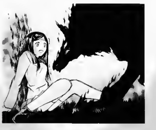
ただその目の光だけは、生物のような意志の存在を感じさせ、なつきを射るように見つめている。

「コイツってば——君がなかなか見つけてくれないから、勝手に出てきちゃったんだよ」

獣は——グル——と低く唸る。

「ただ、早く出てきちゃった分、オーファンにも近くなっててさ。ひとつ間違えれば——愛しさのあまり、キミを食べちゃうかもしれない。——手懐けるには、どっちがご主人か

……



力でわからせるしかないんだ」
　なつきはただ、魅入られたようにその獣を見つめ続けていた。ひどく懐かしいような――それでいて、恐怖――いや畏怖と言うべきか。そんな感情を駆り立てずにはいられない、闇色の獣を。
「さあ、お行き。――君のHIMEは、あの娘だ」
　その言葉をきっかけに、黒い影が飛んだ。
「――！」
　なつきは、間一髪で我に返り、地面に身体を投げ出す。
　獣は、一瞬前までなつきがいた空間に降り立った。
　低い唸り声。甘えるような、威嚇するような。
「くっ……！」
　なつきは必死の思いで立ち上がると、駆け出した。
　獣は、駆け出したなつきの背をわずかな間見つめると、ゆっくりと歩をすすめ、なつきを追い始める。
「がんばってね、夏姫ちゃん……」
　その姿を見つめ、凪は微笑む。
　最初の咆哮を聞いたときから高鳴り続けているなつきの胸の鼓動は、いよいよ激しくなる。
――熱い――
　紋章の痣は、燃え上がるようだ。
　闇色の獣は、徐々に加速し、なつきを追いつめる。
　喘ぎつつ、なつきは学園園の林の中に逃げ込む。
「うわっ！」
　息が上がり、わずかに気を抜いたそのとき、木の根に足をとられ、なつきは転倒してしまう。
　振り向くと、獣はすぐそこまで迫っている。
　なつきは樹の幹にもたれるように、後じさった。
　赤い目がなつきを捉え、この獣が本当に生き物なら、もうその吐息が感じられるだろう距離に迫り――。
「ぎゃあぁぁぁあぁあ――っ」
　なつきの口から、悲鳴が溢れ出す。
　刹那――。
　胸腹の紋章が闇を裂くほどの閃光を放ち、なつきの両掌から、光の粒子が溢れ出した。

〈つづく〉

※後編は「舞-HiMEアニメブック　2学期」に掲載。

DVD&CDカタログ

DVD

『舞-HiME』 DVD1巻

●収録話
第1話「それは☆乙女の一大事」
第2話「ヒミツの放課後？」
●毎回映像特典
新作映像「1話 舞衣とはじめてのブラ」
「2話 風華学園へようこそ」
●毎回封入特典
12ページブックレット
●初回特典
DVD 風華学園出席簿
内容 ①中原麻衣 千葉紗子 清水愛ほか総勢19人のインタビュー
②プロモーションビデオロングバージョン
完全版収録！(ナレーション 舞衣&なつきVer)
●発売日 2005年1月28日**●価格** 5250円(税込)

『舞-HiME』 DVD2巻

●収録話
第3話「炎の舞／姫の闘い」
第4話「姫のイ タ ズ ラ」
第5話「雨……、涙……」
●毎回映像特典
①新作映像「3話 高等部1-A紹介」
「4話 静留 なつきを語る」
「5話 みことのいちにち」
②ノンテロップオープニング
●毎回封入特典
12ページブックレット
●初回特典
初回版 マル秘初期企画書(16ページ)
●発売日 2005年2月24日
価格 7140円(税込)

『舞-HiME』 DVD3巻

●収録話
第6話「ちぇる十七歳(^^)」
第7話「迷子の仔猫たち」
第8話「たいせつなもの。」
毎回映像特典
●新作映像
①新作映像「6話 詩帆のお兄ちゃんとドキドキ」
「7話 奈緒の『世界を釣る』」
「8話 あかねの告白」
②ノンテロップエンディング
●毎回封入特典
12ページブックレット
●初回特典
HiME巡るカレンダー(一学期分)
●発売日 2005年3月25日**●価格** 7140円(税込)

■販売元 バンダイビジュアル

C D

オリジナルサウンドトラックVol.1
姫

舞-HiME
ORIGINAL SOUNDTRACK Vol.1

●本書にもインタビューを収録した（105ページ）梶浦由記氏の音楽を収録したオリジナルサウンドトラックアルバムの第1弾。アリッサ シアーズ（富村愛子）による挿入歌"It's only the fairy tale"も収録。

●収録曲

001 媛星　002 今日の始まり
003 風、空、潮風／004 波乱学園生活
005 忍びよる影／006 闇の舞踏
007 愕天王（ガクテンオー）見参！
008 優しさの真話／009 まか不思議
010 お腹減った！　011 また会おうね
012 夕映えの空／013 闇夜への序曲（プロローグ）／014 デュラン召喚
015 迦具土（カグツチ）降臨
016 It's only the fairy tale
017 午後の日差し
018 小さな幸福（しあわせ）
019 恋をしたから
020 謎が謎を呼ぶ／021 夜の底に沈む
022 鴇色の翼／023 目覚め
024 流星の駆けさ

●発売日 2004年12月22日／
●価格 3000円（税込）

Vol.2は2005年3月24日発売予定！

Shining☆Days
栗林みな実

オープニング主題歌
Shining☆Days

●人気絶頂の歌姫 栗林みな実が歌うオープニング主題歌。イメージソング『小さな星が降りる時』も同時収録。
●発売日 2004年11月3日
●価格 1200円（税込）

エンディング主題歌
君が空だった

●期待の大型新人 美郷あきが歌うエンディング主題歌。「TOMORROW'S TRUE」も同時収録。
●発売日 2004年11月26日
●価格 1200円（税込）

■CD発売元 ランティス／販売元 キングレコード

Character Song 1
Mai Tokiha

キャラクターソングVol. 1
愛しさの交差点

●鴇羽舞衣役の中原麻衣が歌う　舞衣のイメージソング。同時収録は　モノローグ　サウンドシネマ「夏の初めの贈り物」。舞衣のキャラクターカードも同封。
●**発売日**　2004年8月4日
●**価格**　1200円(税込)

キャラクターソングVol.2
水辺の花

●玖我なつき役の千葉紗子が歌う、なつきのイメージソング。同時収録は　モノローグ　サウンドシネマ「センチメンタル　メモリー」。なつきのキャラクターカードも同封。
●**発売日**　2004年9月15日
●**価格**　1200円(税込)

Character Song 2

Character Song 3
Mikoto

キャラクターソングVol. 3
ココロの剣

●美袋命役の清水愛が歌う　命のイメージソング。同時収録は　モノローグ　サウンドシネマ「命　夢色幻想」。命のキャラクターカードも同封。
●**発売日**　2004年9月23日
●**価格**　1200円(税込)

舞-HiMEラジオ風華学園放送部 主題歌
Parade

●中原麻衣　千葉紗子　清水愛が熱唱する「舞-HiMEラジオ風華学園放送部」の主題歌。カップリング曲は「私立風華学園校歌～水晶の守り～」。
●**発売日**　2004年7月22日
●**価格**　1200円(税込)

舞-HiME
Parade

ドラマCD
実録!「裏」風華学園史・第一章

●収録タイトル
01 プロローグ
02 第一話はじまりのころ
03 第二話らんしぇりー らぶそでぃ
04 第三話ウンテル デン リンデン
05 第四話祭りの前と
06 第五話あとの祭り
07 第六話生徒会戯抄（晴は？）
08 第七話幻の伝説
09 第八話シスター紫子の懺悔室
10 第EX話（ボーナストラック）
「執行部長殺人事件～女子高生温泉ツアー 秘湯に待ち受ける衝撃の罠 シスターと女教師は見ていた～前編」
11 エピローグ

●「舞-HiMEラジオ風華学園放送部」で放送したドラマに加え、CDオリジナルのボーナストラックを追加。1～8話には歌のナレーションも追加。さらには キャストのフリートークも収録。
●発売日 2005年1月26日
●価格 3000円(税込)

「第二章」は2005年4月6日発売予定!

キャラクターボーカルアルバム
初恋方程式～第1楽章

●収録タイトル
01 舞衣の小さな想い
02 ハピネス
歌 鴇羽舞衣（中原麻衣）
03 進め！何天王
歌 杉浦碧（田村ゆかり）
04 イノセント
歌 結城奈緒（南里侑香）
05 命のしあわせ!(^^)
06 ぱかぱかへこへこ
歌 美袋命（清水愛）
07 そよ風のダイアリー
歌 日暮あかね（岩男潤子）
08 ラブロケ☆パイロット
歌 宗像詩帆（野川さくら）
09 なつきのこころ
10 綺麗な薔薇のその棘でも
歌 玖我なつき（千葉紗子）

●7人のキャラクターソングを収録したスペシャルアルバム。
●発売日 2005年2月23日
●価格 3000円(税込)

舞-HiMEアニメブック

2005年4月8日発売　2学期

ついに迎えるクライマックス！
HiMEたちのバトルの行方は!?

内容の一部

★描き下ろしカラーイラスト掲載！
★初期イラスト、チャイルドの設定画などを中心に、秘蔵の資料を一挙公開！
★第16話～最終話のストーリーダイジェストを解説つきで紹介！
★監督・プロデューサーをはじめ、メインスタッフにさらに肉迫するインタビュー！
★吉野弘幸氏書き下ろしによる「なつきのプレリュード」（後編）収録！
★人気作家描き下ろしによる『舞-HiME』コミック！
★出演された豪華声優陣のコメントも一挙掲載！

こうご期待！

TVアニメ名作シリーズ
舞-HIMEアニメブック1学期

平成17年4月10日初版発行

■構成・文
大崎悌造（そうゆう舎）
■カバー・本文デザイン
STOL
■協力
サンライズ
バンダイビジュアル
ランティス
アイムエンタープライズ
スペースクラフト・エンタテインメント
81プロデュース
■発行者
秋田貞美

■発行所
株式会社秋田書店　〒102-8101
東京都千代田区飯田橋2-10-8
電話 03-3265-7361（編集）
03-3264-7248（販売）
03-3265-7373（製作）
振替口座00130-0-99353

■印刷所
大日本印刷株式会社

造本には十分注意しておりますが、落丁・乱丁（本のページの抜け落ちや順序の間違い）の場合は、購入された書店名を記入の上、「販売部」宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。但し、古書店でご購入したものはお取り替えできません。

（禁・無断転載・放送・上映・上演・複写）
ISBN4-253-13013-5
©サンライズ
Printed in Japan

CONTENTS

イラストレーションギャラリー……2
キャラクターファイル……13
ストーリーダイジェスト……74
スタッフ&キャスト座談会……89
インタビュー
　久行宏和……100
　谷口悟朗……104
　梶浦由記……106
舞-HiME資料館
　キャラクター設定画……110
　準備稿シナリオ……142
　絵コンテ……161
特別書き下ろしノベル
「なつきのプレリュード」（前編）……173
DVD／CDカタログ……187

★この作品はフィクションであり、実在の個人・団体等にはいっさい関係ありません。